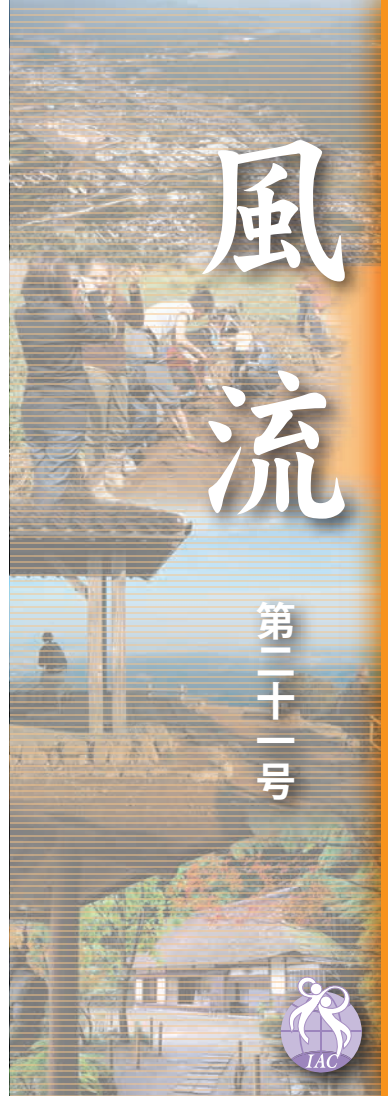


風流

第二十一号



東京の田舎という魅力を

国内外に発信

日の出町長 橋本 聖二



日の出町は、都心から五〇km圏内に位置し、人口はおよそ二万七千人弱、東西およそ十二km、南北二、五km、面積二八kmの広さがあり、その西端には秩父多摩甲斐国立公園の表玄関口となる標高九〇二mの日の出山がそびえています。東側に位置する平地部には、圏央道（首都圏中央連絡自動車道）が走り、日の出インターチェンジの周辺には工業団地やショッピングセンターのイオンモール日の出が進出し、住宅地の整備が進むなど、人と自然が調和した多様性に富んだ緑豊かな町です。

当町では「日本一の福祉の町づくり」を目指して、国や他の市町村に先駆けて子育て支援の充実とお年寄りにやさしい町づくりを進めています。これらの施策により、

町の人口も増加を続け、活気あふれる町となりつつあり、全国の自治体から視察が訪れています。

国際交流という面では当町の取組みはまだ発展途上の段階ですが、自然と人が融合した伝統ある町として多くの人達に日の出町に来ていただきたいと考えております。

数年前、当町の近くにある「高尾山」がミシランガイドで三ツ星を獲得したニュースは少なからず驚きでした。「何故だろう」という疑問を分析すると、都心からの身近なアクセス、幽玄さえも感じさせる豊かな自然、里山や田舎の風情等が、外国人観光客にとって有名景勝地に勝るとも劣らぬ魅力的な存在だということに気づかされました。高尾山と似た自然環境と長い歴史があ

る当町にとつて、自分たちが持っている固定観念を捨て、外国人の方たちが楽しんでもらえるような観光資源の発掘や国際交流にもつながる体験事業を町で実施できるのではないかと、外国人の皆様をお招きして町内観光地巡り等を行ったこともあります。

その中で特に興味を持っていたのが、日の出山と並んで町を代表する観光施設「日の出山荘、中曽根康弘・ロナルドレーガン日米首脳会談記念館」でした。この記念館は、昭和五八年に当時の中曽根総理大臣がアメリカ合衆国大統領訪日時に、総理の別荘である茅葺屋根の古民家で会談した由緒ある場所です。VIP訪問にはセキュリティ上不安要素が多いということでしたが、周囲の反対を押し切つて中曽根総理が日本の田舎の風情をぜひ見せたいとの思いから、この場所で首脳会談を実現させたいきざつがあります。後に、レーガン夫妻は日本訪問の思い出として、特に日の出山荘訪問が印象に残つたと語っております。また、中曽根氏も臨時のヘリコプター発着場から山荘に至るまでの移動の際、沿道の町民の歓迎ぶりに感動したことをよく回顧しております。

まさに、この時の経験や、時の総理大臣がこよなく愛した日の出山荘という存在から、日の出町における外国の皆様へのおもてなし、さらに交流をしてゆくための大きなキーワードが見えてきます。それは気軽に「人情味のある日本の田舎文化に触れることができる環境」だということです。車で都心から約一時間で来られる場所、そこには美しい空気、森の緑、鳥の声、溪流のせ

せらぎ、地場の食材、まだまだ残る古民家や土蔵、流行の言葉でいう「癒し」の素材がたくさんあります。それに加え、町民の温かいおもてなしによるサーブス、お抹茶、そば打ち、芋掘り、マスのつかみ取り等、なつかしい日本の原風景は、外国の皆様や都会の方に喜んでいただけるものと信じております。

また、当町では、観光振興への取り組みの一環として「観光まちづくり事業」を募集し、援助することにより、住民が主体となる活動・取り組みを応援しています。この事業を実施することにより、前のように見過ごしていたもの、外国の皆様が興味を持っていただけのものも見つけられ、人情豊かな日の出町民を最大限に活かした人材育成も進めながら町の特色を出すことができると思います。

なお、国際交流を実現・充実させるためには、外国語による観光施設案内板やパンフレットの整備、通訳といった人材育成等の課題を抱えています。少しずつ環境を整備して行きたいと考えています。

結びに、日の出町にはごみの焼却灰をセメントに造りかえる、世界に誇る最新鋭のエコセメント製造プラントや、現代の日本人のライフスタイルを象徴する大型ショッピングセンターもあります。このように日の出町は、幅広い魅力を秘めた「手ごろな東京の田舎」の存在感と人の温かさを持つ身近な町として、今後も国際交流に努めて行きたいと考えております。

日の出町ホームページ

<http://www.town.hinode.tokyo.jp/>



ペルシア絨毯から イランを知る

6月10日 世田谷区下北沢 北沢タウンホール

「IACの文化交流シリーズにあらたに「モノから知る世界の国たち」が加わり、その初回として「ペルシア絨毯を取り上げました。講師は、代々、一族でペルシア絨毯を扱っているマジッド・ロガニさん（タブリーズ・コーポレーション代表取締役）で、その流暢な日本語の楽しいレクチャーに、二五名の参加者一同、引き込まれていきました。

参加された長澤安志さんは、イランへの渡航歴が豊富で夫人もイラン人ですが、その長澤さんにして、専門的なイラン絨毯のセミナーはなかなかなく、初めて受けて大変よかった、との感想でした。「絨毯学」と名付けてもよいと絶賛したのは、イランに十七回渡航経験がある玉崎孝吉さんでした。

講師のマジッドさんからは、ペルシア絨毯を通じてイランを知ってもらえてよかった参加者の質問から風土が異なる日本での絨毯の使用法とメンテナンスを、マジッドさんら業者が、丁寧に説明することが必要だと感じた、とのことでした。

以下、参加者の井田英恵さんと五十嵐正樹さんの感想を紹介します。



ペルシア絨毯からイランがみえた

井田英恵

セミナーに参加して、ペルシア絨毯からイランの文化や生活を垣間見ることができました。以下、当日の内容をまとめてみました。

高いペルシア絨毯は、ウール、シルク、コットンの三つの天然素材を使っていて、手織りです。安価な機械織絨毯の多くはアクリルやポリプロピレンと呼ばれる合成繊維を使っているそうです。手織りと機械織りの見分け方は、裏を見ること。機械織りは、糸がほつれないように、裏を接着剤で固めているので畳めないのが特徴です。（持ち運ぶ時は丸める）

パキスタンの絨毯に関して言えば、コストパフォーマンスが非常に高い、理由は、物価や人件費が安いから。イランのペルシア絨毯が良いという人に言わせると、パキスタンの絨毯は、下に見られているようですが、その辺りは個人の価値観。安くて質がいい絨毯が欲しいという場合の選択肢に、と講師は提案していました。

さて、健康面に関して気になった点は、合成繊維の体への影響です。お年寄りが合成繊維の絨毯に座ると、絨毯に触れたところから足がすーっと冷えてくる感じがするそうです。天然素材のウールではこういうことがないそうです。

最後は、イランと日本の文化の生活様式について共通点と相違点をまとめました。イランでの共通点は、十足で家にながらない。イランでのパ



日の出町訪問 ボツワナ大使館 一行とともに

6月21日



▲循環組合で、ごみ(焼却灰)をセメント化するプラントの説明を受ける

日の出町と親交の深い地域創造プロジェクトの二瓶長記さんから、日の出町が町の魅力を国内外に発信したい、国際交流にももつと力を入れたいと希望されている、と聞きました。IACでは、各国大使館の中でも、文化交流に大変熱心なボツワナ大使館との交流を提案しました。訪問までの経緯とボツワナ大使館の感想を紹介します。

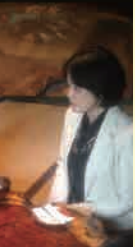
IACの提案を受けて、五月に日の出町産業観光課長の橋本和弘さんと同観光係長の谷合和久さんがボツワナ大使館にて、日の出町のプレゼンテーションをし、まずは、直接、日の出町を体験して欲しい、と招待をされました。それに心え、ボツワナ大使館の参事官タボカ・マタラパビリさん、一等書記官ティラハロ・セカオさん、秘書・観光担当の量昌子さん一行の日の出町訪問が実現しました。

当日は、まず日の出町役場にて町長の橋本聖二さん、副町長の細瀬清さんと懇談、その後は、役場の車で観光課の橋本さんたちの案内で、ごみ(焼却灰)をセメント化する最新鋭のリサイクルプラント施設の循環組合、日の出山荘(中曽根元総理大臣とレーガン元アメリカ大統領が会談した場所)、歴史民俗資料館、イオンモール日の出など、およそ四時間かけて日の出町を見学しました。

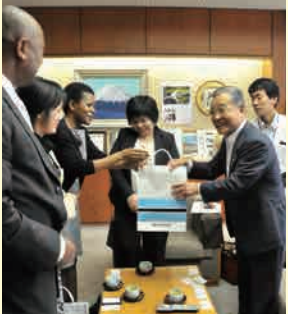
それぞれの施設の面白さもさることながら、都心から車で一時間の「東京の田舎」である日の出町全体が魅力にあふれています。今後、日の出町の国際交流にIACもできる限りの協力をしたいと考えています。



◀日の出山荘の季節の和菓子と抹茶のおもてなしに、ホッと一息



▶お国自慢の交換、ボツワナバスケットと日の出町トマトをお互いにプレゼント



ボツワナ大使館から)

ルシヤ絨毯は、日本の畳と同じです。

相違点は、イランには外には植物がほとんどないので、家の中に植物を飾ったり、絨毯のデザインにして生活の中に取り入れている。日本には外には緑がたくさんあるためか、家の中には植物が少ないと講師がおっしゃっていました。

国は離れていても、共通点があると親しみを感しました。

ペルシヤ絨毯について

五十嵐正樹

タローバリーゼーション研究所・代表

先日、IAC主催の「ペルシヤ絨毯からイランを知る」セミナーに参加、多くの方々から熱心に講師の話の聴いていた。筆者はペルシヤ絨毯については、これまで何の知識も持ち合わせてはいないが、大方の日本人はペルシヤ絨毯について『高い』というイメージが先行し、手が届かない物であるという印象が強いようである。また、ペルシヤ絨毯の購入時、若干の勇気がいるデザイン、価格、大きさなどの面で戸惑いがあるからである。

また、居住環境も問題である。平均的な日本人の住まいは、欧米人からラビットハッチ（ウサギ小屋）と言われたように狭い住宅に住んでおり、絨毯を敷いてご満悦するような環境とは程遠い。しかし、ペルシヤ絨毯には種々の大きさがあり、購入者には選択の余地はあるが、人間には本性として、大きいことは良いことであるという面もあり、できれば大きな家に住んで大きめの絨毯を敷いてみたい望みもある。

イラン国内にはペルシヤ絨毯の五大産地として、イスファハン、タブリーズ、ナイン、カシャーニ、コムがある。産地にはそれぞれの特徴があるため、

最後は、購入者の好みということになるのである。そこで、ペルシヤ絨毯がなぜ高額なのか――急速な経済成長とそれに伴う高いインフレ率（二〇〇七年/二〇％）が元凶のようである――

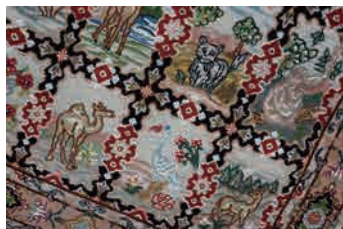
その影響を受け、絨毯産業から撤退し、不動産・建築業へと進出したため、織り子をはじめとする労働者の減少による賃金の上昇が顕著になり、ペルシヤ絨毯の価格は急上昇した――実例をみると、二〇〇五～二〇〇八年にかけて、織り子の賃金は諸物価の高騰と共に毎年三〇％急上昇、絨毯価格も同様に毎年三〇％高騰し、この三年間で二倍に跳ね上がったという。絨毯は今後、益々高価なものになっていくことは必至である。



▲講師のマジッド・ロガニさん
(タブリーズコーポレーション代表取締役)



▲レクチャーの伴もイラン産(ナツメヤシ、ピスタチオ、アーモンド)



▲ペルシヤ絨毯の5大産地の一つ
タブリーズ製(マジッドさんの出身地)

事務局便り

▶ 2つのイベントのお知らせです。詳細は、追ってホームページやFACEBOOKでお知らせしますが、お気軽に事務局にもお問い合わせください。また、関連する風流のバックナンバー11号と20号もご希望の方にお送りします。

食から知る民族文化⑧アルメニア

◎11月3日(土) 午後 田町リーブラにて
◎参加料：2000円 (IAC会員は1000円)
風流20号の「こんにちは、大使館」で紹介したアルメニアを今度は、「食」のシリーズで取り上げます。

世界の民族芸術シリーズ第30回 ハンガリー

◎2013年1月12日(土) 麻布区民センター
◎入場料：2000円(予定)
旧ハンガリー領のトランシルヴァニア(現在のルーマニアの北西部)の民族舞踊と音楽をお楽しみください。トランシルヴァニアについては風流11号の「わがまちで文化交流」で紹介しました。

▶ IACの第6回総会を6月11日、新宿区のソフィア株式会社にて参加者30名(委任状含む)で開催しました。今の目標は、寄附金税額控除が受けられる認定NPOとなることです。皆様の更なるご支援をお願いします。

▶ 各国の工芸品に会えるIACインターネットショップへのお来店をお待ちしております。
<http://iactokyo.shop-pro.jp>
(右写真：藤倉明治)



(事務局：金屋輝美)



▲左からボツワナ大使館の秘書・観光担当の量昌子さん、参事官タボカ・マタラバビリさん、日の出町長・橋本聖二さん、ボツワナ大使館一等書記官ティラハロ・セカオさん

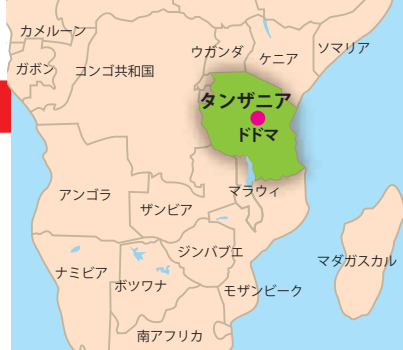


初めての日の出町訪問はとても印象深いものでした。日本は豊かな文化を有し、伝統を守り継いできた国として広く知られていますが、日の出町も例外ではありません。日の出山荘という伝統家屋や文化財を受け継ぎ、穏やかで美しい自然の風景が広がるこの町が、多くの観光客を引きつけているのも頷けます。人口は約一万六八〇〇人と少ないものの、エコ・セメント工場などの活発な経済活動や観光資源が、これからも町を支えていくことでしょう。橋本町長から、日の出町の社会的・経済的取り組みや、住民を支援する政策、それによって挙がっている成果などについて丁寧にご説明いただき、私たちは、日ノ出町との協力関係から多くのことを学べるものと期待しています。橋本町長および関係者の方々から受けた温かい歓迎に御礼を申し上げます。そして、大使館と日の出町の双方にとって為になるコラボレーションを楽しみにしております。日本とボツワナの間で、人と人との交流がさらに深まっていくことを願い、ゆくゆくは、日の出町とボツワナの町で、姉妹都市のような友好関係が結ばれば素晴らしいと考えています。



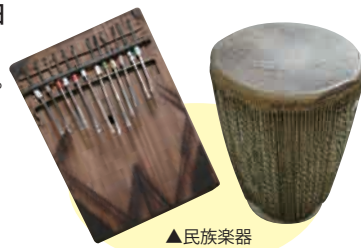
こんにちは、大使館【第11回】タンザニア

恵まれた自然と資源 部族の多様性と統一を重視 絆はスワヒリ語 大使は孫連れ



各国在日大使館は、IACの活動のパートナーです。それぞれの国について、「食」、「モノ」、「民族芸術」などのシリーズとは別に、このコーナーでは直接、その国の在日大使館取材します。引き続きIAC会員の取材で、このコーナーを構成します。ご興味がある方は、事務局にお問い合わせください。

◀タンザニア連合共和国大使館 特命全権大使
Salome Thaddaus SIJAONA(サロメ・タダウス・シジャオナ)さんと孫のサロメちゃん



▲民族楽器

東京・世田谷区の馬事公苑に程近い閑静な住宅街の中のとある住宅。うっかりすると見過ごしてしまいそうな落ち着いたたたずまいのタンザニア大使館で、私たちが迎えてくれた女性がサロメ・T・シジャオナ大使だ。

——タンザニアは山、湖、海、平原—豊かな自然環境に恵まれた国として知られていますね。

大使「北にアフリカの高峰キリマンジャロ山、アフリカ最大いビクトリア湖、東に美しいインド洋、西に世界第二の長さのタンガニーカ湖、そしてたくさんの野生動物が間近で観察できる自然保護区、国立公園が数多く設定されています。年間を通じて世界中から多くの観光客が訪れています。タンザニアの自然は大きな資源でもあるのです」

——タンザニアはまた、人類史的にも歴史あるところだと聞きました。

大使「アフリカは人類発祥の地だといわれています。とりわけタンザニアから 140 万年前のホモ・ハビリス（器用な人の意味）と呼ばれる人類の骨が掘り出されています。また当時のものと見られる動物の骨や足跡も見つかっています。タンザニアは人、動物ともに始まりの地なのです」

——自然だけではなく最近では様々な資源も発見されているようですね。

大使「金、ダイヤモンドなどの宝石などに加え、石油、天然ガスなども見つかっています。日本の商社も開発に参加しています」

——こうしてみるとタンザニアは大変恵まれた国のように見えます。

大使「確かにそうですが、タンザニアは部族の多様性とその統一を大事にしています。タンザニアには 120 の部族があります。これを統一し、同時に多様性を大事にしています。共通の言語スワヒリ語が部族間を結びつけています。タンザニアは政治的にも安定しており、平和を大事にしています。また、一国の平和だけでなく、周辺の紛争国からの難民も積極的に受け入れるなど国際協力も重視しています」

大使は職業外交官出身ではなく、国土省（日本の国土交通省に相当）事務次官をへて日本の大使に。日本に勤務して2年。「日本からの投資促進、観光客誘致、農産物の輸出促進などさらに力を入れていきたい」

インタビューの途中で小さな女の子が現れた。なんと、大使のお孫さんサロメちゃん（5歳）。「東京では寂しいので赴任の時にタンザニアから連れてきました。公邸で孫育てしています」サロメちゃんはインターナショナルスクールに通っているそうだ。かつて日本の人気テレビドラマに「子連れ狼」というのがあった。

主題歌の「しとしとぴっちゃんしとしとぴっちゃん——」というも流行った。

こちらは珍しい「孫連れ大使」と言えるかもしれない。

文：山下靖典（IAC 顧問）
写真：藤倉明治（IAC 会員）



▲「ティンガティンガ」
1960年代後半、タンザニアのダルエスサラーム近郊で誕生した独特の絵画スタイルで、創始者であるエドワード・サイディ・ティンガティンガの名前に由来する。もともとは建築資材の正方形の合板に、塗装用のエナメルペンキを使って、動物たちを大胆にデフォルメした構図と、鮮やかな色彩で描いたのが始まり。



◀「マコンデ」と呼ばれる黒檀の彫刻



▲ドドマ地方で生産されているワイン

広告

沖縄の精霊のおはなし。
沖縄の精霊
キジムナーと男の子の友情のお話。
タイトル・作者
「キジムナーとカミジュ」
たまもと さゆり
ご購入はコチラから▼
<https://www.o-kyohan.co.jp/>

不思議大好き
ソフィアは中近東、中央アジア、アフリカの旅行を得意としています。
不思議大好き直通電話 **TEL: 03-5292-7858**
FAX: 03-5272-6020
ソフィア株式会社 東京都知事登録旅行業 第3-4240
東京都新宿区大久保 1-1-45

一緒に実現する IACの文化交流

- 会員として活動に参加してください。年会費：個人1万円 法人5万円（一口）
- 「風流」の同行取材にご協力いただける方を募集しています。
- 広告を募集しています。

「風流」やIACホームページへの広告で、貴社、貴店のPRとともにIACの活動をサポートしてください。

